

## 調査研究

## アメリカ合衆国における痴呆症高齢者の グループリビングホーム事例研究

鎌田 清子

### A Case Study of Home Care for Senile Dementia Patients in the U. S. A

Kiyoko KAMADA

#### I. 研究調査のねらい

今日急速な高齢化に際して、日本では高齢者の処遇の問題が喫緊の課題として浮上してきた。なかでも超高齢者の割合が次第に高くなる傾向にあるため、とりわけ「痴呆」老人のケアをどうするかに関心が高まっている。自宅で介護をするには家族の負担、とりわけ女性に重い負担がかかることから、何らかの福祉施設入居が避けられないと考えられている。

しかし今日処遇の流れとして、一般住宅と施設の距離をなくする方向が志向されており、中間的な「グループホーム」への入居が試みられている。経営的な面から言えば大規模な施設の方が、建物・職員配置・給食などの経費節減になると思われるが、そこに生活する利用者の側から見れば、大量の入居者への機械的ケアとの批判も浴びかねない。そこから規模はある程度

大きくしても適切な範囲に区切って、さまざまな工夫をほどこし、痴呆が進行するのを食い止める技術が研究されている。

日本でも採り入れられる手法があれば導入したい。各専門分野によって学べきところはさまざまであろうが、本研究では、日本で遅れていると思われる建築学の立場から先進国の福祉施設を調査研究することにした。

文科省科学研究費で申請した訪問国は、北欧をはじめとし、カナダ・アメリカその他であったが、北海道の研究者としては寒冷地に学ぶところが多いと考え、調査地を設定した。もとより現地を訪問しての調査研究は、度重なる交渉、未知の地でのアクセス、加えて途中9.11の事故の余波に巻き込まれ、はじめの計画は幾度か変更を余儀なくされた。それでも当初の計画に近い成果が得られたことは、現地の方々のご尽力と、勤務先での鈴木武夫学長、黒坂満輝学部

長から特段のご高配を賜り、また教職員の方々のご理解とご助力を賜ったことによると深く感謝を申し上げる次第である。

研究期間が本年3月に終了するので、いずれ近いうちに4年間の『研究報告書』を出版、刊行するつもりであるが、ここではその中から特筆に価する事例として1箇所の施設を取り上げ、報告しておきたいと思う。

ここで紹介する「The Atrium」は、アメリカ・ボストンの痴呆性老人向けの施設住宅である。

広く知られているが、アメリカは福祉については自助の国であり、国家の役割は極めて小さく、代わって「NPO」や「民間企業」が介護事業を引き受けている。日本は国家主導のもとに社会保険で対応してきたが、近年小泉「構造改革」路線のもとで、「官から民へ」、「地域住民での相互扶助」、「できることは自分で」とする「小さな政府」が喧伝されている。遠くない将来に自助の名のもとに自立が強要されることは明らかであり、その意味でも我々はアメリカの動向に注目せざるを得ない。

つまりアメリカ社会は、政府を当てにせず自力で生きていく競争社会であるから、現役時代に高い所得を得て、私的に老後に向けて「保険」を掛けられる階層は高い質の介護を受けられるが、低い所得しか得られない階層では「それなりの施設で最低限度の介護」を受けるしかないのである。アメリカの階層別福祉を念頭に置いた上で、はじめに紹介するボストンの事例は、上位階層の痴呆老人の施設であることを断っておきたい。対照的なニューヨークのスラム地区の施設も訪問したが、雰囲気はまるで違っていた。比較はまたの機会に譲りたい。

## II. 施設の背景

この施設住宅は、2000年10月23日に開設されたばかりの最新型痴呆症高齢者専用住宅であ

る。アメリカ東北部海岸地域に居住する初期、中期段階の痴呆症患者を広く受け入れている。Amicus Health Care社が経営する子会社The Colchester, Vt. が所有している施設である。比較的最新の技術が投入されている施設で住宅地域内の日常生活に密接するスーパーマーケットなど各種の商店、商業地区内に隣接していることから、家族・親族・知人が毎日訪問、出入りできる点で立地条件がすぐれている。古い施設に典型的に多用されている外周の高い目隠しを目的とした『囲い堀』も庭園の造形デザインと上手くなじませ、地域の中で全く違和感がないのが家庭的であり印象に残る特徴であった。

アメリカのAssisted Living（介護サービスつき住宅）施設をモデルとした最新施設であり、その特徴を述べると、10項目にまとめることができる。

1. 全室平屋建築、完全個室の確保
2. 3食の食事提供
3. 個人的な全介護サービスの提供
4. 記憶に関する障害者、脳神経障害患者の為に特別な配慮でデザインされた空間、設備で専門的な治療を提供する。
5. 消音・吸音性の高い絨毯、カーペットのデザインは痴呆症患者を自室まで誘導する視覚的な通路を示すようにデザインしている。めまい、ふらつき、追突事故などで転倒した場合にも打撲衝撃、傷害の程度を緩和する事が期待できる。
6. 壁紙にもまた、消音性、吸音性を重視した製品の採用。
7. 色彩設計、太陽光線を室内に取り込めるスカイライト、ルーフウインドウ・デザインの採用。
8. 無菌、抗菌、消臭機能を有する失禁対応（椅子家具）の張り生地を採用している。水拭きなど日常の衛生的な管理ができる。
9. 種々の機能回復プログラムの採用、ピア

ノ演奏、ダンス、手遊び、小鳥の飼育、セラピー犬の訪問などを提供している。

10. 鏡は事実上、共同で使用する空間には使用、存在させない。

患者の介護にはHabituation therapy（有資格者による専門治療法）を採用している。

### Ⅲ. 施設・建築の実情

アメリカ東部地域の伝統的な住宅の形状、平屋建築で家庭的な寸法、規模を重視している。これは福祉施設と一般住宅との距離を狭めていこうとする今日の大きな流れに沿うものである。この住宅は入居者の健康と幸福、入居者の機能的残存能力を引き出し、活性化させるように室内環境をデザインして作られている。玄関入り口と全体の雰囲気はアメリカの少し大きめの住宅と同じサイズである。一般住宅と同じ雰囲気有している。写真－1参照。

平屋（1階建て）住宅は入居者の自立性、安全性、活動性、生きがいのある生活を継続するのを支援する。特別な雰囲気演出するために、快適な環境と織り交ぜた建築設計上の生活支援が重要であると考えられている。

今日、アルツハイマー患者の為の環境の多くが、限りなく『普通の自宅が持っている自由度』と『自立した生活の創出』など、抗菌・殺菌されている介護設備の使用を通じて衛生的な環境、安全性を促進し助長している。自宅から転居、移住する際に、急激な環境変化を感じさせる事が無い。それはここ環境が限りなく一般住宅、自宅のサイズ、雰囲気に近いように創られているからである。

「The Atrium」は入居者の自由、尊厳を侵すことなく、在宅生活の質を高め、より魅力的な支援サービスを提供している。居住空間は、より自宅生活の雰囲気重視する為、「隣人、近隣住区」つまり、お隣さんグループと呼び合っ

て、ユニット・ケア単位で区分している。家族規模の単位で様々の活動に参加することや、グループ相互で刺激し合うことができるからである。魅力的に建築されている内部空間は巧妙な手段で計画されており、視覚的なサイン、デザインされた方向案内板を通じて入居者に合図、指示を与えている。こうしたデザイン上の配慮が有効に作用すると、介護職員が入居者の介護活動を支えていくのに有効である。写真－5(1)、11(1)参照。

この種の施設住宅の平面計画では、共通のリビングルームを取り囲む形で8～10人のユニット・ケア、グループリビングを1単位に住居空間が構成されている。ユニット毎に固有の色彩を決めて、自分の個室のドア色、ドア両脇の壁に自分史、個人の歴史、孫の顔、思い出の写真などを飾るショーケース、シャドウボックスを設置している。個々人にとって大切な記憶、家族、出身地などの写真を飾ることは自室の識別に有効な手法、表札代わりの表示法としてアメリカ、カナダでは採用されて、その有効性が確認されている手法である。写真－3、4参照。

グループリビングのユニットをつなぐ渡り廊下には緑の植栽を配置して、小鳥の飼育、ピアノ演奏、各種楽器の演奏などの空間として各種の治療に使用する空間となっている。冬期の寒冷な気候下では屋内で、屋外の森、庭園で遊ぶような気分転換の空間が必要不可欠となるからである。

この施設住宅の計画の特徴は、全体の色彩計画にあり、居住空間は暖色系色彩を使用し、住棟と住棟を連結する部分には「屋外の庭園」を連想させる緑色、海、川の水を連想させるブルー、青色を使用し、屋根面からの太陽光線を採り入れるスカイ・ライトを組み込むことで屋外空間の演出に成功している。北方圏諸国、積雪寒冷地域など、冬期間、屋内生活を強いられた気候下ではスカイ・ライト、ルーフウインド

ウ、アトリウム建築の技術はビタミン・サンシャインを採り込む空間として極めて重要であり、有効である。写真-2, 14参照。

床面の仕上げ材料には毛先の短いカーペットを全面に採用している。カタカタと靴音の響く床材料、失禁などの水濡れ、水こぼしなどで滑る、滑る危険のある床仕上げ材料は適していないからである。カーペットは清掃管理が困難であると考えがちであるが、プロ用の洗浄機能付き掃除機を使いこなす事で充分保守管理が可能である。

暖色系、寒色系ともに無地柄のカーペットの使用が基本であり、色彩の組み合わせで歩行する通路を指示、案内ガイド、牽引する色彩表示法にも工夫がされている。カーペット、絨毯を採用する理由には、転倒時の打撲、傷害の予防と足腰の関節への衝撃緩和策、車椅子、介護器具・自助具の消音対策としても有効である。しかし、失禁、脱糞、便こねなどの汚損には衛生管理上の弱点がある。しかし、特殊な掃除機具を使用する事でこの問題にもある程度は対応が可能である。写真-5(1), 5(2), 6, 7, 8, 9参照。

近年取り入れられている誰にでも使い易い『ユニバーサルデザイン』の特徴でもある手すり棒のデザインは、従来型のいかにも障害者用とみられる握り棒を使用せず、下部の腰壁と上部の壁紙の見切り板に見せかけた、『手すり板』が壁面の周囲に設置されて違和感を感じさせないような配慮をしている。写真-10, 11(1), 11(2), 13参照。

寒冷地域の痴呆症患者や超高齢者の住宅では、暖房、冷房器具は全て天井の壁際に吹出し口を設置するのが常識的な設備設計とされている。原則として、窓下の腰壁、廊下、通路の腰壁には突出する物は何も設置しない。引っ掛け、火傷、擦り傷などの事故の原因になるからである。冷氣、暖気の吹出す気流速度は体感できな

い程度の微風速度である。写真-12参照。

屋外の庭園に面して、各人の個室が配置されているが、ワンルームにベッド、収納家具などを個人の趣味に合わせて持ち込むことが出来る。室内に専用の洗面台、水洗トイレ、シャワールームが設置されている。厨房設備は設置されていない。写真-15(1), 15(2), 16, 17, 18(1)

従って、3度の食事、お茶とおやつの時間は共同の食堂で入居者が全員揃って、職員からサービスを受けることになる。自室から食堂まで、自分自身で歩行、移動する為、徘徊、迷い込みなどの混乱を防止するため、目印となる壁面装飾、マスコット、壁紙にシンボルパターンとなる動物、花、草、鳥、風景などで空間を特徴付けて、記憶できるように工夫している。これらのデザインは「キュー・サイン」といい、また自分専用のショウウインドウ・ケースが設置され、自室を確認できるよう工夫してある。写真-3, 4, 19(2)参照。

冬が長く、雪で外出が自由に出来ない地域で暮らす人びとほど、鳴声のきれいな小鳥の飼育、セラピー・ドッグとの触れ合いが心を和ませ、癒しの治療効果が期待できる。写真-18(1), 18(2), 19(1)参照。

この家にも地域住民のセラピー・ドッグが定期的に訪問サービスをして協力している。地域住民と入居者との交流が上手に為されており、家族が自由に出入りできる点で安心して入居させる事ができる。

#### IV. プログラムの特徴

Pro-Active Careとは、充分に訓練された介護職員の介護と活動的な入居者が一体となって行われている日常的な介護サービス(Pro-active staff + Active residents = Daily means of providing Care)を意味している。概念はアルツハイマー症、ほかの記憶障害者が生きがいを

感じ、充実感が持てる活動、対応する為に必要な初歩的な手法と哲学を反映している。活動的でない生活スタイルは機能低下、依存心の増大につながりやすい。ここの職員達は入居者達の個々に必要とするニーズに注意を払うことをこのプログラムの目標にしている。それは初期障害を把握、正確に理解して、その改善計画、プログラムの遂行、自身による記憶維持活動などを意味している。

大きく2つの主たる目標が設定されている。

- 1) 入居者が日常生活で快適感、幸福感を感じることを。
- 2) 入居者の残存能力、自立性を最大限に引き出すこと。

したがって事前に本人情報を得て正しく理解する、社会的な活動歴など、家族との連絡を密に取る事は入居者の介護ニーズ、残存機能の強弱、関心・興味の領域などを理解するのに不可欠である。入居者はこれら各種のプログラムに参加する事で励まされ、元気つけられるが、参加する、しないも本人の自由である、プロ・アクティブケアの挑戦は入居者が生きがいのある、満足できる経験を継続する為の多様な選択肢を準備している。個人的、若しくはグループ活動に参加することを通じて、また彼らの個人的な介護ニーズに対して最大限の満足が得られるように対応するプロ・アクティブ・ケアプログラムはこの介護環境の中で入居者が元気であり続けるよう支援していく為の最適介護メニューをめざすものである。

## V. 必要経費、サービス内容

施設入居は長期間にわたる賃貸契約ではなく、購入、若しくは入居権利金が必要である。以下はその費用である。

居室タイプ	価格	税処理後の費用
セミ個室	3600 \$ ・月額	2983 \$ ・月額

個室1型	4300 \$	3578 \$
個室2型	4500 \$	3748 \$
レスパイト介護	125 \$ ・日額	(邦貨110円で13750円)

なおレスパイト介護とは、在宅で同居しながら、介護に従事する家族が病気、用事、気分転換などで短期的に高齢者を預けることができる短期滞在介護サービスのことである。マサチューセッツ州では一般消費税が28%上乘せられるが個人の収入、所得額により負担費用は変化する。個人人によって各種の医療保険が摘要されているので自己負担額も異なってくる。

月額料金に含まれているサービス内容は

1. 3食とおやつ代
2. 玄関ドアへの徘徊防止対策と24時間体制での監視
3. 個人的なサービスの提供
4. 医療機関との調整連絡業務
5. 日常生活（風呂、整容、着脱、食事、洗濯、緊急搬送、排便介助）
6. 週間毎の寝具交換、個人的な衣料の洗濯サービス
7. 毎日の室内清掃
8. 治療的な活動プログラム
9. 24時間緊急連絡・救急通報システム
10. その他のサービス、訪問看護師を通じて各自で購入している

追加サービスの多くは本人の医療ニーズであるが、必要な限りMedicare、若しくは個人の医療保険で支払う事ができる。

## VI. この施設住宅の特徴と印象

長期介護サービスが必要な『寝たきり高齢者』に近い人々が暮らす住宅はアメリカにおいても、人里離れた交通の便、アクセスが悪い場所に設置されているのが通例である。この計画事

例は新築事業にもかかわらず、商業地域に組みこむ形で、しかも全室平屋（1階建て）で造られている。外からの訪問者を積極的に受け入れて、家庭の雰囲気重視し、施設臭が全く感じられない所であった。痴呆症、アルツハイマー病といっても、症状は多様であり、本人自身で認知、理解出来る残存能力の範囲は広い。その為、入居者達は、見知らぬ訪問者に対しては警戒心と自分自身が人目に晒される事、見られる事を嫌って自室に引きこもってしまった。介護する側も人権の尊重から人物の写真撮影を禁じている。この種の住宅では人物の撮影を禁じており、極めて困難である背景には痴呆症患者、脳神経障害者に対する『尊厳の遵守』の原則が貫かれている事がある。

この「Atrium」の計画では、長い冬の室内生活を重視して、建物全体に明るくきれいな色彩、グレアを抑えた高照度照明の採用、騒音の出ない暖冷房、空調設備がほどこされていたためか、施設臭、汚臭が全く感じられなかった点が印象深い。

この運営組織が自信を持って打ち出している介護の特徴を『DPS』介護システムと銘打っている。

- A) Design—物理的な建築環境とインテリアデザインの優秀性。
- B) Program—専門家による積極的な介護、入居者を支援することでの日常的な中庸を保持する訓練プログラム内容。
- C) Staff—高度に訓練され、奉仕している職員が、入居者に対し安全で自宅と同じ雰囲気を保ち、親しみやすい雰囲気を醸し出している。

これら3要素が効果的に組み合わせられた場合に入居者の症状の経過にとって良い結果、成果が出せると考えているようである。

生活水準、物価、貨幣価値が日本とは異なる

とはいえ、日額15000円を目安に、月額45-50万円、年額では約600万円の費用負担を必要とする事は、全米における全施設でほぼ共通している。

高齢者自身の側でも、私的な医療保険などへの加入をはじめ、早くから備えていた人が多いとはいえ、あまりにも高額負担であるため、子供が親の介護費用を負担する家族も多いという点が気がかりでもある。

## VII. 視察調査の結論

2002年2月28日にアメリカ東部ボストンを訪問したが、現地は突然雪が降り始めるなど非常に寒い気候であった。晴れた日は雪が積らず、暖かい日もある地域であるにもかかわらず、高齢者の居住する建築、設備に対する研究、配慮、特に建築デザイン、色彩が病状、心理、精神衛生に与える効果を活用している点では、最先端の施設であると評価できたのである。介護職員の質の高さ、人件費、施設の維持管理費用、などを考えると入居者の負担金額は二つ星、三つ星程度のホテル価格に相当する。より安全性の高い、質の高いサービスのホテル価格はこの2倍、つまり1日で3万円近くを必要とする。これを考慮すると、ここでは各種医療保険、自治体からの補助が受けられることから、高すぎる金額ではないと納得するにいったのである。しかし、こうした環境で手厚い介護を利用できる人は老後の年収で40000ドル以上得られる階層であり、全体の5%に該当する人々である。

しかしこれとは別に、貧困階層の痴呆症患者、脳機能障害者の受け入れ施設住宅も見学したが、極端に建築的な配慮、特にインテリアデザイン、色彩の活用策、空間の水準、介護、機能訓練プログラムの内容に格差がある現実も視察する事ができた。

4年間の国際研究、継続研究として文部科学



省、科学研究費補助金を受けて、スウェーデン、デンマーク、アメリカ合衆国で実施した視察調査事例の一つをまとめた報告である。今後は系統的に住宅政策、国別、地域別に自治体による高齢者福祉政策、建築計画、家族、住民参加の実情などを取りまとめて報告書、図書として出版する予定である。

## VIII. 謝 辞

この視察調査の実現に際してはボストンに本拠を置くNGO、『Adaptive Environment』代表Ms.-Valerie Fletcher氏の情報提供、現地案内など手厚い協力支援を得て、実現できた事に対して衷心より深謝する次第である。付記して感謝と御礼を申しあげたい。

## 写真の説明文

- 1. 「The Atrium」正門玄関は地域の商店街から直接出入り出来るように配置している。
- 2. 木製の囲い塀で美しい中庭、パティオを構成している。この庭に各居室が面するように配置計画が為されている。2月下旬にも雪が降って美しい雪景色を演出している。
- 3. 各入居者のドア入り口には自室の番号、ショウケースが名札の代りに配置されている。入居者には番号は記憶できない場合が多い。
- 4. 入居者にとって最も大切にしている記憶、思い出、夫、妻、子供、孫の写真、結婚式の写真などが多く使用されている。
- 5. 10人を基本にしたグループで家族的な雰囲気重視するユニットケアの考えにもとずき住空間を構成している。中央に共通の広いリビングルームを確保して、入居者の

趣味に合わせて、ピアノなど共通の趣味の道具が配置されて日常の治療にも使用することができる。

- 6. グループ毎に色彩のデザインが異なる配色が使用されている。  
女性が多いグループ、男性の比率は女性に比較して少ないこともあって、ピンク、パープル、など高彩度の明るい暖色が多く使用されている。
- 7. 共通で使用する家具のデザインは特殊な製品ではないが、鋭角が無い、擦り傷、打撲傷、等危険性の少ない安全な形状で統一されている。
- 8. 椅子家具の張り生地は通常の布生地ではなく、失禁に対応する防水性、抗菌性の製品である。しかし、花柄を中心にきれいな布生地と全く同じく柔らかさも兼ね備えていて違和感が感じられない。
- 9. 施設の床仕上げ材料は全て弾力性のあるカーペットを採用している。しかし、無地柄が原則で、色彩の組み合わせによって歩行経路、通路の直進をガイドする方向指示の役割を果たしている。  
柄の複雑な敷物は痴呆症高齢者にとって、識別の困難、混乱、妄想につながり正しい歩行の妨げになって好ましくない。
- 10. 従来多用されてきた、『握り棒』の手すりは使用せず、見切り板様の『手すり板』を配置することで、施設臭を感じさせず、家庭の和やかな雰囲気を醸し出している。この『手すり板』はアメリカ住宅の一般仕様になっている。
- 11. 照明計画は全体に均等の照度が確保出来るように4周の壁際、中央の天井照明を併用している。通常、欧米の住宅では均質全室照明は行わない。痴呆症高齢者には、照度の強い蛍光灯を採用した全室照明で治療効果をも兼ねている。一般の高齢者施設に

においても全室照明は採用せず、白熱灯による部分照明で家庭の雰囲気重視している。

- 12. 寒冷積雪地域の高齢者にとって冬の暖房は不可欠である。

24時間全室均質暖房が不可欠となる。通常の暖冷房設備は、大きな窓開口部、出入り口など、冷気温、ダウンドラフトを防ぐようにヒーターを配置するのが原則である。しかし、痴呆症高齢者の場合には、あらゆる危険を排除する為に天井面から暖気、冷気を吹出す方式をとる。これは北米、カナダでは標準仕様になっている。

- 13. 寒冷地の冬を屋内で過ごす為の工夫として、住区ユニット間をつなぐ場所に緑の植物、樹木を多く配置してウインターガーデンの空間を演出している。居住空間とは反対色であるグリーン、空のブルーなど寒色を使用することで屋外にいる気分が暖かい屋内で体感出来る。ラチスなどを効果的に仕様したデザインは屋内でありながら、中庭にいる気分になれるため、気分転換の空間として重要である。配置されている樹木、植物は全て人工物であり衛生管理、異物飲みこみなどに配慮がされている。
- 14. 住棟と住棟を連結する接合部分にウインターガーデンの空間を設置している。天井から自然の日光、太陽光を採りこむためにスカイライト、スカイルーフを採用し、空の色、ブルーと緑を上手く活用することで、冬でも屋外の気分を楽しむことが可能になっている。
- 15. 個人の専用個室は完全にプライバシーが確保されており、全室が中庭に窓が面するように配置されている。お気に入りのベッド、衣料を整理する整理ダンス、なるべく危険な家具は持ち込ませないように室内は広い空間が確保されている。これは、安全

性の確保、日常の清掃衛生管理などがし易い為でもある。

- 16. 自室内に一室化されている専用のシャワー、トイレ室がある。

トイレ・シャワー室内に専用の洗面台が配置されており、病状の程度に応じて鏡(ミラー)が配置されている。病状が進むと、鏡の使用は妄想につながる為、使用させない。

- 17. 日常的にはシャワー入浴に対応するが、折りたたみ式のシャワー椅子が付いている。洗浄もし易く衛生的である。
- 18, 19. 屋内のウインターガーデンでは樹木、花と共に鳴声がきれいな小鳥を飼育している。また、近隣の住民ボランティアがアニマルセラピーの訪問サービスを提供している。セラピードッグと入居者との相性があるため、犬なら何でも良いという訳にはいかない。訓練されている善の犬が部外者には吠えて、触らせてもくれなかったのである。
- 20. ユニットとユニットを連結する渡り廊下、通路には、徘徊、彷徨を防ぐ予防策として、動物、鳥の巣、草花など記憶し易く、愛着の持てるデザインパターンを採用している。これを目印にして、自分の部屋まで戻ることが出来るからである。インテリアデザインとしてもきれいにまとめられている。写真-19(2), 20。





写真-1



写真-2



写真-3



写真-4



写真-5(1)



写真-5(2)



写真-6



写真-7



写真-8



写真-9



写真-10



写真-11(1)



写真-11(2)



写真-12



写真-13



写真-14



写真-16



写真-15(1)



写真-17



写真-15(2)



写真-18(2)



写真-18(3)



写真-18(1)



写真-19(1)



写真-19(2)



写真-20